

年間第3 2 主日

第一朗読 二マカバイ 7・1-2、9-14
第二朗読 二テサロニケ 2・16～3・5
福音朗読 ルカ 20・27-38

2022.11.06

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音の中で、復活を信じないサドカイ派とイエス様、復活である方ですが、の会話が出て来ました。サドカイ派は復活を信じない、って今日の聖書の中では説明されていますけれども、ただ単純に唯物主義的な考え方の人たちではないですね。復活を信じないって言ったら、これは聖書の側の、キリスト教側の説明ですけども、サドカイ派の人たちは「そんなことはない、自分たちは復活を信じている」と言うかも知れません。

でも、サドカイ派の人たちが信じているのは、神の民の復活なんです。難しい話になってしまいますけども、つまりは、神様がご自分の民を集められました、けどその民は理想の状態でもないし、外国に支配されてしまっている、でもやがていつか神の民が望ましい状態に、人間の支配も脱し、そして神様が望んでいらっしゃる状態として、この地上で栄える時が来る。それを待ち望んでいる。だから、そのために神の民のそれまでの間の時間を過ごす人っていうのは、神の民が消えてなくならないように次の世代を残していくっていう、でもその個人というものは復活しない。だから、神の民が復活する、その時のための、日本的な言い方をすれば、捨て石になっていく。積み重ねて、やがて神様が民全体を神の民として、その民族に栄光を与えてくださる、というのがサドカイ派の考え方です。

そして、ファリサイ派、今日ファリサイ派は出て来ませんでしたけども、聖書の中ではユダヤ教のいろんな考え方の人々が出て来ます。で、やっぱり派が違うっていうことは、考え方が違うから派が違うわけですが、ファリサイ派は、完全に神の民が復活させられる、でもその時までには神の民が正しくあるために一所懸命正しく生きた人たち、あるいは神の民に尽くした人たちが、終わりの日の、神様が民全体に民族の栄光をお与えになるときにその喜びに与れないっていうのはあまりにも狭い考えなのではないかなということで、今日の第一朗読、マカバイ記が朗読されましたけど、律法に従って処刑されていく人たちはやがて復活するんだ、っていう希望が語られてましたけど、正しく生きた人たちは神様が神の民を復活させるときに一緒に復活させら

れて、苦勞した分その喜びに与るんだってというのが、ファリサイ派とかあるいはイエス様の時代の多くの人になんとなく信じていた復活です。

キリスト教はどうでしょうか。イエス様の教えから復活のことについて考えるときに、キリスト教は全ての人が神様の憐れみによって終わりの日に復活させられる、そして永遠の命に、って信じてます。ただし、神様は一人ひとりに自由を与えられたのだから、人との繋がりや神様との繋がりを完全に拒否する自由も理論的には残っている。だから、「地獄ってもうなくなるんですよ」とか、「地獄に行く人はいないんですよ」とは言わないんですが、でも、憐れみの中で、つまり正しく生きた人じゃない人でも、憐れみを受けてそしてその憐れみを拒否しなければ、神様のもとで永遠の命を受けるってというのがキリスト教の考え方です。

三つありました。一人ひとりというのは順番に死んでいく。でも子孫を残して、やがて民族が全体として栄光を受ける日が来る、っていうのと、それから、正しく生きた人は最後の栄光を受けるときに復活させられてその栄光を共に味わう、それと、みんなが憐れみの内に復活させられて、正しく生きた人もそうでなかった人も拒絶しなければその栄光に入れられる。

それというのは、死んだ後の話だけではなくて、この地上の生活において一人ひとりの人間をどのように見るのかってということにも繋がってくるんです。だから、全体のための一人の人間というのは、繋いでいくための道具に過ぎないのか。サドカイ派の人たちって、だから人間を大切にしている様子ってないですね、聖書を読めば。まあそれはキリスト教側の福音書だからそうかもしれないけど。で、正しく生きている者だけが大切なんだってというファリサイ派と、そうじゃない、いろんなたとえ話で、後から来た労働者もおんなじ賃金をもらうとか、たとえ話がありましたよねとか、そういう中で、すべての人が、神の民が正しくあるために貢献した人もしていない人も等しく同じものを受けるとっていうのと。

で、わたしたちは三番目を生きているんだというのを時々忘れがちかもしれません。教会なんかでも、今コロナ禍ですからできてないんだけど、地区ごとの当番とかあるでしょう。それって、教会のみんなが一緒に掃除したり、役を果たしたり、何かをすることなんですって呼び掛けられて、でも実際にやるのは一部の人だっていうことで不満を持ってしまう。ほんとは教会が言ってるのは、全員が働くべきなんだっていうんじゃないで、全員が結果としての良いものを受け取るようにということなんですよ、教会は。「だから黙って働け」ってことではないんですけども、そこの中心にいるのは、イエス様です。イエス様がご自分の死を通してすべての人に永遠の命を分け与えてくださる、わたしたちの側は基本的に、永遠の命に関してはフリーライダーなんだ、自分たちは何もそれをもたらす権利はないけど、だけどイエス様に分けてもらって

る者たちなんだっていうことを忘れてはならない。だからわたしたちも、たくさん働いた人がたくさんもらう、そうじゃない人はそうじゃないっていう、本来の人間のそういう感情というか、それを乗り越えてどんな人とも分かち合う、それが教会でありキリスト信者だと言うことなんだと思うんです。それは簡単じゃないですね。やっぱり、イエスとの繋がりがないと心からはそう言えません。あるいは、理論的にはそうなんだけど、実際の場面になったらやっぱり心がざわざわしてしまう。できれば二番目のファリサイ派のラインを取りたいと心が言ってくる、というようなことになるかもしれません。

しかし、イエス様の復活を信じるわたしたちは、二番目、貢献した人だけが貢献した分を受け取る、っていうのではないんだということだけは譲れないわけですね。それは、教会の中だけじゃなくて、人類全体、社会の中でも、やっぱり互いに良いものをみんなが受けて、そして喜ぶ、そういうものにしていきましょう、そして一人ひとりが大切なんだ、民全体としての集団というものが栄えればいいんじゃないんだ、一人ひとりが大切にされなければならないんだっていうことでもあります。

と同時に、ある意味では、サドカイ派の考えが全部駄目ということでもないですね。今自分たちはやがて良いものを受け取る人たちのための準備をするように神様がお定めになったんだ、ということもやっぱり忘れてはならない。みんな自分のため、自分のためだけを考えるのではない、ということですね。

そんなわけで、今日、復活ということそのものは、今のお互い同士の間関係、社会の在り方というものの中に何を希望するかと繋がってるんです、ということをお願いしたんです。もちろん、親しい人たちや神様の御手の中で永遠の安らぎを与えられているという希望のうちにある。そこに慰めをいただきながら、でもこの地上のわたしたち自身がイエス様から分け与えられた恵みを生きている。その思いの中で、お互い同士裁き合うのではなくて、恵みを分かち合う者である。そうなっていきたい。その希望を新たにして、それぞれの中に今日もイエス様の恵みを受け取りたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>